樎崎遺跡

福岡県筑後市大字下北島所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書

第9集

1993

筑後市教育委員会
樫崎遺跡

1993

筑後市教育委員会
序

樫崎遺跡は、県営干拓地等農地整備事業 筑後西部地区の圃場整備事業に伴い、平成4年度に予定地内に埋蔵する文化財の調査を行ったものであります。

樫崎遺跡からは、掘立柱建物跡、溝、道路状遺構などが発見されました。なかでも、筑後市で始めて確認されました道路状遺構からは、水田地区の集落の歴史を探る貴重な手懸りが得られました。

本報告書が、今後の文化財保護思想普及の一助として、また学術研究や郷土研究の資料として、広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に調査及び報告書作成にあたり、御指導、御鞭撻いただきました諸先生方に感謝申し上げますとともに、猛暑の中を連日調査に参加されました作業員の方々に厚く御礼申しあげる次第であります。

筑後市教育委員会
教育長 森田基之
例　言

1. 本書は、平成４年度に県営千拓地等農地整備事業 筑後西部地区の圃場整備事業に伴って実施された樫崎遺跡（筑後市大字下北島字樫崎 940外 所在）発掘調査の報告書である。

2. 調査に係る費用は、筑後市が負担し、国・県からの補助を受けた。また、発掘調査は筑後市教育委員会が実施した。

3. 調査は1992年7月1日から12月16日まで実施した。

4. 調査対象面積は10,000㎡、調査面積は3,500㎡である。

5. 遺構実測図及び遺構写真は小林勇作、調査地の空中写真は（有）空中写真企画、遺構の全体図は写真エンジニアリング（株）が行った。また、遺物の実測図・写真・製図は調査担当者の他に永見秀德、平塚あけみの協力を得た。

6. 本書に示す方位はすべてG. N.（座標北）とする。また、遺構表示は下記の略号に従る。

   S B ……掘立柱建物跡   S D ……溝・溝状遺構   S F ……道路状遺構
   S K ……土 壊   S P ……柱穴・ピット   S X ……その他

7. 本書の執筆・編集は小林が行い、挿図・図版のレイアウトでは、平塚の協力を得た。
本文目次

第1章 調査の経過 ................................................. 1
第2章 遺跡の位置と環境 ........................................... 3
第3章 調査の記録 .................................................. 5
第1節 検出遺構各説 ............................................... 5
第2節 出土遺物各説 ............................................... 20
第4章 おわりに ..................................................... 34

挿図目次

第1図 1902年（明治35年）の遺跡周辺地形図（1/25000） .......................... 4
第2図 周辺の遺跡分布図（1/25000） .................................. 4
第3図 横崎遺跡位置図（1/2500） ..................................... （折込み）
第4図 横崎遺跡遺構配置図（1/400） .................................. （折込み）
第5図 揮立柱建物実測図①（1/80） .................................... 6
第6図 揮立柱建物実測図②（1/80） .................................... 7
第7図 揮立柱建物柱穴掘形土層断面図（1/60） ................................. 9
第8図 S D05・10土層断面図（1/60） ................................... 14
第9図 S D11土層断面図（1/40） ...................................... 14
第10図 S D28・29土層断面図（1/40） ................................... 15
第11図 S D30土層断面図（1/40） ...................................... 15
第12図 S D41土層断面図（1/40） ...................................... 16
第13図 道路状遺構平面図（1/150）および変遷図（1/60） .......................... （折込み）
第14図 道路状遺構と切断面図（1/60） ................................... 19
第15図 溝出土土器実測図①（1/3） ..................................... 21
第16図 溝出土土器実測図②（1/3） ..................................... 23
第17図 土壌出土土器実測図（1/3） ..................................... 24
第18図 S F200上層出土土器、実測図（1/3） ................................ 27
第19図 S F200中層出土土器、実測図（1/3） ................................ 29
第20図 S F200下層・最下層、S F190最下層出土土器実測図（1/3） ................ 31
第21図 ピット・その他の出土土器実測図（1/3） ................................ 32
第22図 石器実測図（1/2） ............................................. 33
表 目 次

第1表 揚立柱建物柱穴埋土土層一覧表 .......................... 10
第2表 揚立柱建物柱穴埋土土層一覧表 .......................... 11
第3表 揚立柱建物柱穴埋土土層一覧表 .......................... 12
第4表 揚立柱建物柱穴埋土土層一覧表 .......................... 13

図版目次

図版1 横崎遺跡全景（気球写真、南西上空から）
図版2 (1) 横崎遺跡全景（気球写真、西上空から）
        (2) 横崎遺跡E区全景（気球写真、真上から）
図版3 (1) A区S F200、S F190全景（北から）
        (2) D区S F200全景（気球写真、真上から）
図版4 (1) S E 50（東から）
        (2) S B 60（南から）
        (3) S B 70（西から）
        (4) S B 100（東から）
        (5) A区S F200（中央断面、南から）
        (6) D区S F200西側断面（東から）
        (7) D区S F200東側断面（西から）
        (8) S F190東側断面（西から）
図版5 溝・土壌・道路状遺構上層出土土器
図版6 道路状遺構上層出土土器
図版7 道路状遺構中層・下層・最下層出土土器
図版8 (1) 道路状遺構最下層出土土器
        (2) ビット・その他の出土土器
        (3) 石器
第1章 調査の経過

桜崎遺跡は、平成4年度に県営干拓地等農地整備事業 筑後西部地区の闇場整備事業に伴い確認された遺跡である。

平成3年11月、福岡県筑後川水系農地開発事務所から筑後市教育委員会に平成4年度施工予定地内の埋蔵文化財の取扱いについての依頼があり、事業関係者との事前協議の末、現地調査を行った。その結果、遺跡はほぼ全面に分布していることが予想されたため、その後の協議によって削平を受ける部分の3,500㎡を発掘調査することとなった。

発掘調査は、平成4年度の国庫補助事業として、平成4年7月1日から12月16日まで実施したが、この間の10月13日から11月2日は、筑後中学校武道場の緊急発掘調査が入ったため、延べ5ヶ月にわたり実施した。7月1日から予備調査に入り、7月20日から重機による表土剥ぎを開始し、7月27日から掘り下げ、遺構実測、写真撮影などを行った。

12月3日には気球による空中写真撮影、12月14日にはヘリコプターによる航空測量を実施し、12月16日に調査を終了した。また12月12日には現地説明会を行い、市民の方々をはじめ多くの考古学ファンの参加を得た。

なお、調査後の整理作業および報告書の作成については、筑後市教育資料館内にて行った。

調査関係者は下記の通りである。

調査主体　筑後市教育委員会
総括　教育長　森田基之
庶務　社会教育課長　下川雅晴
　社会教育係長　松永盛四郎
　社会教育事務主査　黒田洋一
　　高木恵美子
　　安徳房子
　　下川冷子
　　木本敏昭
　　近藤美穂
　　江崎紀彦

—1—
水 田 進
三 森 雅 之
永 見 秀 徳 （文化財専門職）

体育係長
渡 辺 幹 夫
体育係
江 口 昌 勝

調査担当
文化財学芸員
小 林 勇 作 （嘱託）

調査参加者（順不同、敬称略）
緒 方 昭 子
木 下 ハキノ
木 室 ミドリ
古 賀 ヤヨ子

堤 ミツヨ
寺 崎 タクミ
寺 島 エツコ

寺 島 キ ック
寺 島 千代子
中 尾 博 幸

広 重 美 恵 子
井 上 明 美
田 中 律 子

富 安 五 男
中 村 久 代
成 清 安 作

延 フジエ
深 町 千津子
松 尾 輝 子

村 上 幸 子
吉 開 朝 子
吉 田 裕

吉 田 喜 美 子

整理参加者（順不同、敬称略）
平 塚 あけみ （整理補助員）

野間口 靖 子
江 崎 千 鶴

このほか、福岡県教育庁南教育事務所技術主査 伊崎俊秋氏のお世話により三溝町の方々に作業に従事して頂いたことや、太宰府市教育委員会文化課主任技師 狭村真一氏をはじめ、次の方々から貴重な御指導、御教示を頂き調査を無事に終了することができた。

記して感謝の意を表します。（順不同、敬称略）

佐田茂（佐賀大学教授）、西健一郎（九州大学助手）、佐々木隆彦（福岡県教育庁文化課）、山本信夫、城戸康利、中島恒次郎、山村信栄、緒方俊輔（以上 太宰府市教育委員会）、桑畑

光博（都城市教育委員会）萩原裕昭、松村一良、桜井康治、富永直樹、近澤康治、大石昇、古

賀正美、園井正隆、水源道範、白木守（以上 久留米市教育委員会）

また、筑後市郷土史研究会会長 近本喜統氏には報告会で大変お世話になりました。

ー 2ー
第２章 遺跡の位置と環境

遺跡は福岡県筑後市大字下北島字桜崎に所在する。

筑後市は福岡県南部、筑後平野のほぼ中央に位置し、南北に国道 209 号線、JR 鹿児島本線東西に国道 442 号線がそれぞれ走る。市の中心部となる筑後市役所周辺には、江戸時代の頃から栄えた町並みがわずかに残る。市内には蛇行しながら西流する河川があり、北から山ノ井川、花宗川、矢部川となる。

市北部は、八女市から西方に延びる八女丘陵が、枝分かれをしながら中位段丘を形成し、多数の古墳群と遺跡が点在する。石人山古墳、欠塚古墳の前方後円墳や瑞王寺古墳、一ツ塚古墳の円墳は筑後市の古墳を代表し、丘陵の南斜面には、弥生時代に集落遺跡として前津遺跡群、蔵数遺跡群、田畑遺跡などが展開する。

緩やかな斜面を形成しながら低地台地へと移り変わる市中央辺りに、先に記した山ノ井川が流れ、これを中心とした若葉遺跡群や高江遺跡、坊田遺跡などの複合遺跡が存在する。

南部は標高 5 m 未満の低位段丘が続く。周辺の遺跡としては、縄文から古墳時代にかけての集落跡である裏山遺跡や、弥生時代の集落・墓地跡である常用遺跡、梅島遺跡などが拡げられる。また、菅原道真を祭神として建てられた水田天満宮周辺には、水田荘跡も確認されつつある。今回報告する樫崎遺跡もこれに関連するものである。

近年、筑後市内は急速な開発による調査が進むと同時に、遺跡の存在が徐々に明らかにされ、今後の成果がおおきに期待される。

以上、概略を述べたが、詳細は筑後市教育委員会刊行の報告書を参照されたい。

(註)

1. 筑後市文化財調査報告書 第 8 集 「欠塚古墳」筑後市教育委員会 1993
2. 筑後市文化財調査報告書 第 3 集 「瑞王寺古墳」筑後市教育委員会 1984
3. 筑後市文化財調査報告書 第 4 集 「前津中の玉遺跡」筑後市教育委員会 1987
4. 筑後市文化財調査報告書 第 6 集 「蔵数遺跡群」筑後市教育委員会 1990
5. 筑後市文化財調査報告書 第 5 集 「田塚遺跡」筑後市教育委員会 1988
6. 筑後市文化財調査報告書 第 7 集 「高江遺跡」筑後市教育委員会 1991
7. 「裏山遺跡」筑後市教育委員会 1966
8. 「狐塚遺跡」筑後市教育委員会 1970 に一部所収

— 3 —
遺跡名
1. 福崎遺跡
2. 熊野坂東寺
3. 高江遺跡
4. 前津中ノ玉遺跡
5. 羽犬塚遺跡
6. 羽犬塚町畑
7. 辻遺跡
8. 若菜絵塚遺跡
9. 坊田遺跡
10. 石塚寺跡
11. 井原口遺跡
12. 狐塚遺跡
13. 水田天満宮
14. 裏山遺跡

第2図 周辺の遺跡分布図(1/25000)
第3図 樱崎遺跡位置図(1/2500)
第4図 椎崎遺跡遺構配置図（1/400）
第3章 調査の記録

本遺跡は、花宗川の南約500mの所に位置する。
調査は農繁期と重なったため、その時期に合わせて重機を投入し、調査区内の表土の除去を行った。調査区は、西から時計回りにそれぞれA区・B区・C区・D区、その中央をE区と称した。A区〜D区は表土（淡灰茶色砂質土）を取り除くとすぐ地山（濃黄色粘土）が検出された。E区は表土、包含層（濃茶色粘質土）の下に地山が同じく検出され、これが遺構面となる。なお、E区は他の調査区と比べ、70cm程度高くなっている。
調査の結果、溝9条、掘立柱建物7棟、道路状遺構などが検出され、いずれもE区を中心に広がる。出土遺物は弥生土器・石器・須恵器・土師器・瓦器・輸入陶磁器などが出土している。
以下、それぞれの遺構、遺物について報告する。

第1節 検出遺構各説
（1）掘立柱建物
いずれもE区の南部に集中し、ほとんどが1間×1間のプランを形成する。柱穴掘形状はどれもしっかりしており、柱痕跡を認めるものが多くた。出土遺物はS B70からのわずか1点のみであった。

SB50 [第5図・図版4(1)]
1間×1間の掘立柱建物で、柱間は桁行3.4m、梁行2.45mを測る。柱穴掘形状はいずれも橢円形で、規模は40〜50cm、深さ30cm前後を測る。棟方向はN－18度30分ーEを示す。また、柱痕跡が明瞭に残り、径12cm前後の柱使用が考えられる。P3は誤認して掘り下げたために図化できなかった。遺物は出土していない。

SB60 [第5図・図版2]
1間×1間で、柱間は桁行3.0m、梁行2.7mを測り、棟方向はN－42度ーEを示す。柱穴掘形状はいずれも橢円形で、規模は70〜100cm、深さ55cm前後を測る。柱痕跡は認められない。柱穴埋土中からの出土遺物はない。

SB70 [第5図・図版3]
1間×1間で、柱間は桁行3.6m、梁行3.3mを測る。棟方向はN－3度30分ーEで、柱穴
第5図 掘立柱建物実測図 ① (1/80)
掘削はいずれも楕円形を呈する。規模は45〜70cm、深さ40〜70cmを測る。柱痕跡はP2とP3で認め、それぞれ径10cm前後の柱使用と考えられる。また、掘削面からさらに10〜20cm程度下がる。遺物はP3の柱痕跡最下層から黒曜石を1点出土しており、掘立柱建物から出土した唯一の遺物である。

SB80（第5図）
柱間はP1〜P2で4.1mを測り、柱穴掘削はいずれも円形状を基本とする。建物方向はN
-77度-Wで規模は60cm前後、深さ45〜55cmを測る。また、中間にはもう一つの柱穴があり、柱間2.0m前後の2間ものになることも考えられる。柱痕跡はP1とP2で検出し、径は15cmを測る。遺物は出土していない。

SB90 [第6図]
掘立柱建物跡と考えられる柱穴が2つ並んで検出した。推定プラン桁行長1間（2.7m）×1間で建物方向はN-70度-Wを示す。柱穴掘形はいずれも隅丸方形を呈し、規模は50cm前後、深さ40cmを測る。柱痕跡はP2で検出し、径10cmの柱使用が想定される。出土遺物はない。

SB100 [第6図・図版4(4)]
1間×1間の掘立柱建物であるが、柱穴掘形は他の建物と違い特異なプランを呈する。いずれも隅丸長方形で、2段ないし3段掘りになっている。規模は120〜160cm、深さ60〜90cm、柱間は桁行3.6m、梁行2.3mを測る。棟方向はN-68度30分-Wを示し、柱痕跡は認められない。ここでも出土遺物は認めない。

SB110 [第6図]
1間×1間の掘立柱建物跡と想定する。柱間は桁行2.8m、梁行2.7mを測り、N-20度30分-Eを示す。柱穴掘形はいずれも隅丸方形を呈し、規模は50cm、深さ30〜50cmを測る。柱痕跡は認められない。出土遺物はない。

なお、第7図（柱穴掘形土層断面図）および第1〜4表（柱穴埋土土層一覧）は、掘立柱建物跡と想定したビットのうち、残存状態が良好である掘形に対してできるだけ半載し、土層断面を図示したものである。該当するものについて参照していただきたい。
第7図 擬立柱建物柱穴推定土層断面図（1/60）
<table>
<thead>
<tr>
<th>SB50</th>
<th>SB60</th>
</tr>
</thead>
</table>

(P1)
1. 淡黒茶色土
2. 濃茶色土
3. 淡黒茶色粘土
4. 濃黑茶色粘質土
5. 淡黒茶色粘質土（乳茶色粒子混）

(P2)
1. 濃黒茶色土
2. 淡黒茶色土（乳茶色粒子混）
3. 黄茶色粘質土
4. 淡黒茶色粘質土
5. 淡黒茶色土
6. 淡黒茶色土（茶色粒子を少し含む）

(P3)
1. 濃黒茶色粘質土
2. 濃茶色粘質土
（やや水分を含む）
3. 濃茶色粘質土
（乳茶色ブロックを多く含む）
4. 淡黒茶色粘質土

(P4)
1. 濃黒茶色粘質土
2. 濃黒茶色粘質土
3. 乳黄色ブロック
4. 淡黒茶色粘質土
5. 濃茶色粘質土
6. 濃黒茶色粘土
（茶色粒子を多く含む）
7. 濃黒茶色粘土（茶色ブロック混）
8. 濃黒茶色粘土（しまっている）

第1表  錬立柱建物柱穴埋土地下観察表

ー 10 ー
### 第2表 据立柱建物柱穴埋土層一覧表

<table>
<thead>
<tr>
<th>SB70</th>
<th>SB80</th>
</tr>
</thead>
</table>

#### （P1）
1. 淡茶色粘質土
2. 濃茶色粘質土
3. 淡茶色粘質土
   (乳茶色粒子を多く含む)
4. 深黒茶色粘質土
5. 深黒茶色粘土 (しまっている)

#### （P2）
1. 濃黒茶色粘質土
   (黄色粒子を少し含む)
2. 淡茶色粘土
   (黄色粒子を多く含む)
3. 深黒茶色粘質土
4. 濃黒茶色粘質土 (3とほぼ同じ)
5. 濃黒茶色粘土
   (茶色粘土を少し含む)
6. 濃黒茶色粘土
   (茶色粘土を多く含む)

#### （P3）
1. 黒茶色粘質土
2. 深黒茶色粘質土
3. 深黒茶色粘質土
   (黄色ブロックを少し含む)
4. 深黒茶色粘質土 (2とほぼ同一)
5. 深黒茶色粘質土
   (黄色粒子を少し含む)

#### （P4）
1. 淡茶色粘質土
2. 淡茶色粘質土 (ややばさばさ)
3. 淡茶色粘質土 (1とほぼ同一)
4. 黒茶色粘質土
5. 深黒茶色粘土
6. 乳黄色粘土

#### （P5）
1. 淡黒茶色粘質土
   (黄色粒子・ブロック混)
2. 乳黄色ブロック
3. 淡黒茶色粘土

#### （P6）
1. 淡黒茶色粘質土
2. 淡茶色粘質土 (ややばさばさ)
3. 濃黒茶色粘質土 (1とほぼ同一)
4. 黒茶色粘質土
5. 深黒茶色粘土
6. 乳黄色粘土
<table>
<thead>
<tr>
<th>SB80</th>
<th>SB100</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>(P 3)</td>
<td>(P 1)</td>
</tr>
<tr>
<td>1. 濃黒茶色粘質土  （黄色粒子を多く含む）</td>
<td>1. 濃黒茶色土</td>
</tr>
<tr>
<td>2. 濃黒茶色粘質土  （黄色粒子を少し含む）</td>
<td>2. 淡黒茶色土  （黄色粒子を多く含む）</td>
</tr>
<tr>
<td>3. 淡黒茶色粘質土</td>
<td>3. 濃黒茶色土 （乳灰色ブロック混）</td>
</tr>
<tr>
<td>4. 淡黒茶色粘質土  （乳灰色粒子を多く含む）</td>
<td>4. 濃黒茶色粘質土  （乳灰色ブロックを多く含む）</td>
</tr>
<tr>
<td>S B 90</td>
<td>S B 100</td>
</tr>
<tr>
<td>(P 1)</td>
<td>(P 2)</td>
</tr>
<tr>
<td>1. 濃黒茶色土  （黄色粒子を少し含む）</td>
<td>1. 淡茶色土 （黄色粒子を多く含む）</td>
</tr>
<tr>
<td>2. 淡黒茶色土</td>
<td>2. 淡黒茶色土  （黄色粒子を少し含む）</td>
</tr>
<tr>
<td>3. 淡黒茶色土 （乳灰色粘土混）</td>
<td>3. 濃黒茶色土  （黄色粒子を少し含む）</td>
</tr>
<tr>
<td>4. 淡黒茶色粘質土  （乳灰色粒子を多く含む）</td>
<td>4. 濃黒茶色土  （黄色粒子・ブロック混）</td>
</tr>
<tr>
<td>5. 濃黒茶色粘質土</td>
<td>5. 濃黒茶色土  （黄色ブロックを多く含む）</td>
</tr>
<tr>
<td>(P 2)</td>
<td>(P 2)</td>
</tr>
<tr>
<td>1. 淡黒茶色粘土</td>
<td>1. 淡黒茶色土 （黄色粒子を多く含む）</td>
</tr>
<tr>
<td>2. 淡黒茶色土</td>
<td>2. 淡黒茶色土  （黄色粒子を少し含む）</td>
</tr>
<tr>
<td>3. 乳灰色粘土</td>
<td>3. 濃黒茶色土  （黄色粒子を少し含む）</td>
</tr>
<tr>
<td>4. 淡黒茶色粘質土</td>
<td>4. 濃黒茶色土  （黄色粒子・ブロック混）</td>
</tr>
<tr>
<td>5. 濃黒茶色粘質土 （4とほぼ同一）</td>
<td>5. 濃黒茶色土  （乳灰色ブロックを多く含む）</td>
</tr>
<tr>
<td>6. 淡黒茶色土  （乳灰色粒子を多く含む）</td>
<td>6. 濃黒茶色土  （乳灰色ブロックを多く含む）</td>
</tr>
<tr>
<td>7. 淡黒茶色粘質土</td>
<td>7. 淡黒茶色粘質土</td>
</tr>
<tr>
<td>8. 淡黒茶色粘質土  （乳灰色ブロックを多く含む）</td>
<td>8. 淡黒茶色粘質土</td>
</tr>
<tr>
<td>9. 濃黒茶色粘質土</td>
<td>9. 濃黒茶色粘質土</td>
</tr>
</tbody>
</table>

第3表 掘立柱建物柱穴埋土土層一覧表

— 12 —
第4表 掘立柱建物柱穴埋土土層一覧表

<table>
<thead>
<tr>
<th>SB100</th>
<th>(P 4)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1. 黒茶色土</td>
<td>1. 黒茶色土</td>
</tr>
<tr>
<td>2. 黒茶色土</td>
<td>(黄色粒子・ブロックを多く含む)</td>
</tr>
<tr>
<td>3. 淡黒茶色土（黄色粒子を少し含む）</td>
<td>3. 淡黒茶色土（黄色粒子を少し含む）</td>
</tr>
<tr>
<td>4. 淡黒茶色土（黄色粒子を多く含む）</td>
<td>4. 淡黒茶色土（黄色粒子・ブロックを</td>
</tr>
<tr>
<td>5. 淡黒茶色土（茶色粒子を多く含み、黄色粒子を少し含む）</td>
<td>多く含み、ややかたい）</td>
</tr>
<tr>
<td>6. 淡黒茶色土</td>
<td>5. 淡黒茶色土</td>
</tr>
<tr>
<td>7. 淡茶色粘土</td>
<td>(黄色粒子・ブロックを少し含む)</td>
</tr>
<tr>
<td>8. 淡黒茶色粘質土</td>
<td>6. 濃黒茶色粘質土（黄色粒子を少し含む）</td>
</tr>
<tr>
<td>9. 淡茶色粘土</td>
<td>7. 濃黒茶色粘質土</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>(乳灰色粒子を少し含む)</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(2) 溝

S D02

A区の東部を南北にはるかに4.7 m分を確認した。溝は途中で終息するが、この続きと思われる溝を北の調査区外で検出し、北東方向に向かって延びる溝を確認している。埋土は黒茶色粘質土の单一土層で、断面は逆台形状を呈し、上端幅60cmを測る。溝底面は凹凸が著しく、南北の高低差はほとんど認められない。遺物は土師器細片を出土している。

S D05（第8図）

C区の中央部で検出した南北にはるかに5.5 m分を確認した。溝はSD10、SD180に

---

第4表 掘立柱建物柱穴埋土土層一覧表

<table>
<thead>
<tr>
<th>SB100</th>
<th>(P 4)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1. 黒茶色土</td>
<td>1. 黒茶色土</td>
</tr>
<tr>
<td>2. 黒茶色土</td>
<td>(黄色粒子・ブロックを多く含む)</td>
</tr>
<tr>
<td>3. 淡黒茶色土（黄色粒子を少し含む）</td>
<td>3. 淡黒茶色土（黄色粒子を少し含む）</td>
</tr>
<tr>
<td>4. 淡黒茶色土（黄色粒子を多く含む）</td>
<td>4. 淡黒茶色土（黄色粒子・ブロックを</td>
</tr>
<tr>
<td>5. 淡黒茶色土（茶色粒子を多く含み、黄色粒子を少し含む）</td>
<td>多く含み、ややかたい）</td>
</tr>
<tr>
<td>6. 淡黒茶色土</td>
<td>5. 淡黒茶色土</td>
</tr>
<tr>
<td>7. 淡茶色粘土</td>
<td>(黄色粒子・ブロックを少し含む)</td>
</tr>
<tr>
<td>8. 淡黒茶色粘質土</td>
<td>6. 濃黒茶色粘質土（黄色粒子を少し含む）</td>
</tr>
<tr>
<td>9. 淡茶色粘土</td>
<td>7. 濃黒茶色粘質土</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>(乳黄色ブロックを多く含む)</td>
</tr>
<tr>
<td>10. 濃黒茶色粘土</td>
<td>8. 濃黒茶色粘質土</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>(乳黄色ブロックを少し含む)</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(2) 溝

S D02

A区の東部を南北にはるかに4.7 m分を確認した。溝は途中で終息するが、この続きと思われる溝を北の調査区外で検出し、北東方向に向かって延びる溝を確認している。埋土は黒茶色粘質土の单一土層で、断面は逆台形状を呈し、上端幅60cmを測る。溝底面は凹凸が著しく、南北の高低差はほとんど認められない。遺物は土師器細片を出土している。

S D05（第8図）

C区の中央部で検出した南北にはるかに5.5 m分を確認した。溝はSD10、SD180に
切られ、さらに調査区外に延びる。断面は「U」字状を作り上端幅120 cm、下端幅30 cm、深さ40 cm前後を測っている。溝底面は凹凸が著しく、北方に向かって僅かに下方に傾いている。下層からの出土遺物はなく、中層から弥生土器、土師器、サヌカイトなどを出土した。上層からは弥生土器、土師器、青磁などが出土した。

**S D10 [第8図]**

S D05と交わり南北方向にはるる溝で、10.0 m分を確認した。溝はこれより南側の調査区外に向かって延びる。断面は「U」字状を作り上端幅120 cm、下端幅70 cm前後、深さ30 cm程度である。溝底面は凹凸が著しく、高低差は北が南より26.0 cm程度高くなっている。下層からの出土遺物はなく、中層から弥生土器、土師器、青磁、白磁、石鈴などを出土した。中層遺物は上層遺物と類似するため時間差が余りないうちに堆積したものと考える。

**S D11 [第9図]**

E区西部で検出した南北に並ぶ溝で、42.0 m分を検出した。溝の埋土状況はどの場所でもほぼ同様の堆積が見取られる。断面は「U」字状を作り、下層と中層の間で平らな面（整地面）を確認する。上端幅70 cm、下端幅50 cm、深さ30〜45 cmを測る。溝底面は凹凸が著しく、北方に向かって緩やかに低くなっている。最下層からの遺物はなく、整地面の埋土から弥生土器、土師器、黒曜石の細片をわずかに出土した。

<table>
<thead>
<tr>
<th>SD05</th>
<th></th>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1.</td>
<td>淡茶色粘土 (黄色ブロックを多く含む)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2.</td>
<td>淡茶色粘土 (淡灰色・淡茶色のブロックを含む)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>3.</td>
<td>淡茶色粘土 (黄色粒を含む)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>4.</td>
<td>淡茶色粘土 (黄色粒を含む)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>5.</td>
<td>淡茶色粘土 (淡灰色・淡茶色のブロックを含む)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>6.</td>
<td>淡茶色粘土</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>SD05・10</th>
<th></th>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1.</td>
<td>淡灰色粘土</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2.</td>
<td>淡灰色粘土</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>3.</td>
<td>淡灰色粘土 (黄色ブロックを多く含む)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>4.</td>
<td>淡灰色粘土</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>5.</td>
<td>淡灰色粘土</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>6.</td>
<td>淡灰色粘土</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>SD10</th>
<th></th>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1.</td>
<td>淡茶色粘土 (黄色ブロックを多く含む)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2.</td>
<td>淡茶色粘土 (淡灰色・淡茶色のブロックを含む)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>3.</td>
<td>淡茶色粘土 (黄色粒を含む)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>4.</td>
<td>淡茶色粘土 (淡灰色・淡茶色のブロックを含む)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>5.</td>
<td>淡茶色粘土</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

第8図 S D05・10 土層断面図(1/40)

第9図 S D11土層断面図(1/40)
S D25

B区南部で検出した南北に延びる溝で、15.0m 分を検出し、南方が若干低い。埋土は淡灰茶色粘質土の単一土層で、かなりの削平を受けているが、弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器などの遺物を出土した。

S D28 [第10図]

E区北西隅で検出した溝は南北にはしり、S D11・29のそれぞれと交わったところで終息する。15.5m 分を検出し、上端幅80cmを測る。溝底面は凹凸が著しく、高低差はほとんどない。遺物は弥生土器、土師器、黑曜石、サヌカイトを出土している。

S D29 [第10図]

E区北西隅から南に延びるが、S D11に交わる手前で西方向に向かって曲がる。さらにそのまま延び、途中S D30に切られる。溝は42.0m 分を検出し、上端幅50cm、下端幅15〜25cm、深さ15cmを測る。溝底面は滑らかで、S D11に向かって傾斜する。溝の埋土状況からどの場所でもほぼ同様の堆積が認められ、断面は逆台形状を呈す。遺物は下層から黑曜石、サヌカイト、土師器を出土し、上層から弥生土器、黒曜石、土師器、瓦器を出土した。

S D30 [第11図]

E区北東隅から南西に向かって延びる溝で、34.0m 分を検出す。溝の埋土状況からどの場所でもほぼ同様の堆積が認められる。断面は「V」字状を呈す。上端幅60cm、下端幅5〜10cm、深さ20〜35cmを測る。溝底面は滑らかで、南西へ緩やかに傾斜する。遺物は弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器、黒曜石、サヌカイトを出土した。

S D40

E区北部で西から東に向かって延びる溝で、12.7m 分を検出する。断面は「U」字状を呈す。上端幅100cmを測り、溝底面は凹凸が著しく、西方向に傾斜する。埋土は濃茶色粘土（赤
茶色粒子を多く含む）の単一土層であった。出土遺物はない。

S D 41 [第12図]
C区東部で検出した南北に延びる溝で、6.3 m 分を検出する。断面は「U」字状を呈す。上端幅50cm、下端幅10cm、深さ20cmを測り南へ若干傾斜する。出土遺物はない。

S D 180
C区西部で検出した南北に延びる溝で、SD 05を切る。遺構の残りが悪く、埋土は淡灰茶色粘質土の単一土層で、出土遺物は認めない。

(3) 土 墻

S K 37
E区南西隅で検出した。長軸1.5 m ×短軸1.3 m、現存の深さ10cmを測る。円形の浅い土壌で底面は凹凸が著しい。出土遺物はない。

S K 39
E区北西隅でSD 28、SD 29を切るように検出した。長軸3.3 m ×短軸1.5 m、現存の深さ20cmを測る。底面は凹凸が著しい。遺物は下層から弥生土器片と石鎚を出土した。

S K 44
E区北東隅で検出した。長軸2.5 m ×短軸1.3 m の楕円形を呈し、底面は凹凸が著しい。現存の深さは20cmを測る。遺物は下層から弥生土器片、黒曜石、土師器、陶器を出土した。

S K 69
E区北東部でSD 30に切られて楕円形状に検出した。長軸3.0 m ×短軸2.0m、現存の深さは20cmを測る。遺物は下層から中世の白磁を出土する。

(4) 道路状遺構

道路状遺構はA区東端（A区SF 200）、D区北端（D区SF 200）からE区を避けるように縦状に検出する。A区SF 200の北端は南東方向に延びる道路状遺構（SF 190）と交差す
る。それぞれ1条ないし2条の側溝を有するタイプで、道路面と考えられる硬面を上層（第二硬面）と中層（第一硬面）で確認する。今回確認された硬面は溝に沿った状態で検出されたことから、互いに密接な関係があるものとして捉えることにした。

（註）

D区S F 200は、遺構のほとんどを誤認して第一硬面まで掘り抜いてしまったために、硬面は土層断面から観察したことをあらかじめ断っておきたい。また、遺物は上層資料としてあげた。

以下、各道路状遺構について述べる。

A区S F 200 [第13図・図版3(1)]

延べ20.5m分を検出した幅4.2m～4.5mの道路状遺構は、遺構底面東側に南北にはるか溝（D1）1条と一体化され、側溝的な要素を持つものと考える。隣側には幅30cm前後での段を若干認めるが、溝としては捉えられないため除外した。

道路面と考えられる硬面は上層（第二硬面）と中層（第一硬面）で確認し、道路状遺構は少なくともⅢ期で構成される。第Ⅰ期は地表面を剥ぎだしした状態で、道路面は上部幅1.5m、現存深さ35cm、側溝は上端幅80cm、下端幅20cm、現存深さ65cmを測る。第Ⅰ期から第Ⅱ期へと移る段階で、幾度かの修復が行われる。第Ⅱ期は第Ⅰ期道路面に上部幅1.5m、厚さ約5cmの土を覆い被せ、わずかながら溝の拡張をしている。道路面（第一硬面）は上部幅1.9m、現存深さ30cmで、側溝は上端幅100cm、下端幅50cm、現存深さ50cmを測る。第Ⅲ期は側溝が存在せず、遺構の全体に20cm前後の埋土が覆う。道路面となる第二硬面は、遺構のほぼ全面にわたり濃灰色砂質土上に2mm程度の黒茶色砂質土が覆い、鈍分が酸化沈着して固まっている。

遺物は溝の最下層で白磁、中層で弥生土器、黑曜石、須恵器、土師器、輸入陶磁器、瓦器、上層で弥生土器、黒曜石、須恵器、土師器、輸入陶磁器、瓦器などを出土する。

S F 190 [第13図・図版3(1)]

A区S F 200と交差し東方向に延びる道路状遺構は、延べ3.0m分を検出するが、その先は確認されない。A区S F 200との切り合いはないため同時期のものと考えられる。A区S F 200と同じく1条の側溝を持つタイプであるが、第一硬面を確認するのみである。側溝（D4）は上端幅100cm、下端幅20cm、現存深さ60cmを測る。第一硬面はA区S F 200と同じく、ほぼ全面にわたり濃灰色砂質土上に2mm程度の黒茶色砂質土が覆っている。

遺物は溝下層で弥生土器、土師器、輸入陶磁器などを出土する。

—17—
D区 SF200 [第13図・図版 3(2)]
延べ13.5m 分を検出し、遺構幅3.2 m 〜3.8 m を測る。道路面と考えられる硬化面はここでも上層（第二硬面）と中層（第一硬面）で確認することができた。時期区分はA区 SF 200と同じくⅢ期に分けられる。

第Ⅰ期は構造上異なる点が多い。遺構全体からは、東西方向に平行してはるか側溝を2条検出し、基底部には径5 cm〜10 cm 大の礫を敷き詰めてある。さらに、東〜西方向に沿って並ぶピットも検出した。北側側溝（D2）は上端幅80 cm、下端幅30 cm、現存深さ45 cmを測り、南側側溝（D3）は上端幅70 cm、下端幅20 cm、現存深さ40 cmを測る。基底部に点在するピットは不整形でバラッキが大きく、概して長さ70〜80 cm、幅50 cm前後で、約50 cmの間隔で並ぶ。Ⅰ期から第Ⅱ期へと移る段階で幾度かの修復が行われる。道路上（第一硬面）は上部幅1.0〜1.2 m でほぼ一定の高さを示す。また、西側は礫直上で確認され、東側は凹面に粘質の土壌（礫を少し含む）を混せて固めている。Ⅲ期は側溝の存在はなく、遺構のほぼ全面にわたって濃灰色砂質土が覆い、鉄分の酸化沈着により固まっている。

遺物は総て資料で黒曜石、須恵器、土師器、輸入陶磁器、瓦器などを出土する。

(5) ピットおよびその他の遺構
A区東部とE区北東部でまとまったピット群を検出す。性格はほとんどが不明であるが、幾つか遺物を含む遺構もあった。SD04・06は重機による削平を受けた擾乱であり、溝の底からは重機の爪痕やビニール紐などの出土を認めている。また、SD04からは染付細片を出土する。

「参考文献」

1. 久留米市教育委員会  「筑後国府跡」久留米市文化財調査報告書第51集  1987
2. 久留米市教育委員会  「安武地区遺跡群Ⅰ」 久留米市文化財調査報告書第56集  1988
3. 福岡市教育委員会  「有田・小田部第7集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第139集  1986
4. 福岡県教育委員会  「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告→13→」 1988
5. 都城市教育委員会  「大岩田村ノ前遺跡」都城市文化財調査報告書第14集  1991
6. 東京考古談話会  「東京考古」 9  1991

— 18 —
第Ⅰ期
A区 SF 200
D区 SF 200

第Ⅱ期
A区 SF 200
D区 SF 200

第Ⅲ期
A区 SF 200
D区 SF 200

図示

第13図 道路状況構平面図（1/150）および変遷図（1/60）
第２節 出土遺物各説

S D04 [第22図、101]
石器
石縁（101）黒曜石製で尖端と左脚部を欠損し、択りが比較的浅い両面加工を施す。

S D05 [第15図、1]
土師器
皿（1） 溝の中層から出土した。底面は平切で、体部内外面はヨコナデ調整である。胎土は細砂粒を含み、明黄褐色を呈する。

S D06 [第22図、105]
石器
使用剣片（105） 黒曜石製で表面の左右縁に刃こぼれが認められる。

S D10 [第15図、2〜14]
弥生土器
甕（2・3） 2は底部で、平底をなし胸部へ移行する部分でやや外反する。内外面ともにナデ調整で刷毛目は薄い。胎土は少量の砂粒を含み、淡黄茶色を呈する。3は口縁部で形状は「く」の字状に外反する。頸部に突立を貼付しナデ調整を施す。胎土は少量の砂粒を含み、淡赤茶色を呈する。いずれも溝上層から出土した。

土師器
皿（4） 中層から出土した。復原口径8.2 cm、復原腹径5.4 cm、器高2.1 cmを測る。底部は平切で立ち上がりはやや外反し、内外面ともヨコナデを施す。淡赤茶色を呈し、焼成は良好である。
鍋（5） 溝の上層から出土した。胸部と口縁部との境は内外に稜を有している。内外面ともにナデ調整で突立上部に5 mm程度の刷毛目を施し、表面は口縁部付近まで暗の付着がみられる。胎土は少量の砂粒を含み、色調は淡赤褐色を呈する。

瓦器
甕（6・7・8） 6は内外面ともにヨコナデ調整で、胎土に微砂粒を含み、淡乳白色を呈する。7は体部の一部が残存し、外面はヘラケズリ、内面はヨコナデ調整を施す。胎土は微砂粒を含み、淡乳灰色である。8は底部が1/2残存し、復原底径5.8 cm、高台高0.8 cmを測る。高台は内外面がヨコナデ、外面がヘラケズリで見込みはヘラみがきを施す。胎土に微砂粒を含み、
銀白色を呈する。6 ～ 8 はどれも上層出土遺物である。

瓦質土器

釜（9） 溝の下層から出土した。破片のため器形の復原はできない。肩部に菊花紋のスタンプを施す。内外面ともにナデ調整で、胎土は乳白色で 2 mm 大の砂粒を少し含む。色調は内外面とも淡黒灰色で、焼成は甘い。

捏鉢（10） 上層からの出土である。外面はタテ刷毛目を施した後、ナデ調整を行い、内面はヨコ刷毛目を施している。胎土に 2 mm 大の砂粒を多く含み、色調は乳白色を呈する。復原底径は 21.5 cm である。

白磁

皿（11） 下層から出土した遺物で、口縁部外面は稜を有している。釉は乳白色で外面に釉ダレがみられる。胎土は淡乳白色で細かい貫入があり、焼成は弱い。

青磁

碗（12・13） いずれも龍泉窯系で錦絵化が施される。12は復原口径 21.5 cm を測り、内外面は貫入がある。焼成は弱く胎土は青灰色で、淡乳緑色の釉をかける。上層出土の遺物である。13は溝下層から出土の細片で胎土は乳灰色に胎色の透明釉をかける。内外面ともに貫入がある。

須恵器

捏鉢（14） 溝の中層から出土した。口縁部の細片で突端上面に自然釉がかかる。内外面ともにヘラケズリを施し、胎土は微砂粒を含み、暗灰褐色を呈する。
S D11 [第16図、15〜17]

弥生土器

倭（15・16） いずれも上層の遺物である。15は口縁部の破片で「く」の字状に外反する。内部面ともにヨコナデで仕上げる。胎土は粗く、淡赤褐色を呈している。復原口径は22.0cmである。16は平底をなし体部へ移行する部分でやや外反する。内部面はナデで外縁の刷毛目は薄い。胎土は2〜4mm大の砂粒を多く含み、淡黄茶色を呈する。

土師器

皿（17） 上層遺物である。復原口径10.8cm、復原径径8.5cmで内面および体部外面はヨコナデで、外縁部は縁切り痕と板目が残る。微砂粒を含み、淡赤褐色を呈す。

石器（第24図、103・104）
二次加工石器（103・104） 103は黒曜石製で、表面に自然面を残す。裏面の左側縁に二次加工を施している。104は黒曜石製で、表面の右側縁に二次的な刃部加工を施している。

S D25 [第16図、18〜22]

土師器

釜（18） 細片のため詳細は不明である。肩部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がることが、口縁部はやや外反気味である。胎土に微砂粒を含み淡赤茶色を呈す。

瓦器

釜（19） 復原口径は10.0cmで口縁部から体部に移行する部分でヘラケズリを施す。その他はヨコナデで仕上げる。胎土は精選され、乳白色を呈している。

瓦質土器

土鍋（20） 細片のため詳細は不明である。口縁部に突托を設け、胎土は2mm大の砂粒を多く含み、淡灰色を呈す。内外面ともにナデ調整である。

青磁

碗（21） 内面底部は沈線で区切られ、内外面に貫入がある。胎土は淡青灰色で胎色の透明釉をかける。復原径径は6.5cmである。

陶器

椀（22） 天目椀である。胎土は乳灰色で、光沢のある黒茶色の釉を内外面と外縁体部まで厚くかける。丁寧に仕上げている。

S D28 [第22図、106]

石器（106） サヌカイト製で表面に自然面を残す。表面左部に刃こぼれがみられる。
SD30（第16図、23〜27）

土師器

皿（23） 上層遺物である。復原口径11.1cm、復原底径8.0cmで内面および体部外面はヨコナデで、体部は上切刃の痕が残る。胎土は微砂粒を含む淡赤茶色を呈す。焼成は良好である。

瓦器

柲（24） 上層出土で、復原口径15.8cmを測り、体部中位下半には指頭による形成の後、ヘラケズリを施す。体部中位上半および内面は、ヨコナデで仕上げている。胎土は精選され銀灰色を呈し、焼成は良好である。

白磁

皿（25） 溝の中層から出土する。復原高台径5.6cm、高台高0.6cmを測り、内面は沈線で区切られる。胎土は黒色粒子を含む乳白色で、淡青色の透明釉を全面施釉している。
碗（26） 口縁部は平担で白色の半透明な釉をかけ、胎土は青みがかった白色を呈する。上層から出土した遺物である。

須恵器

大甕（27） 上層からの出土遺物である。体部の破片で内面は平行凹き文、外面は格子凹き文が施され、器壁の厚さ1.0cmを測る。胎土は2mm大の砂粒を少し含み、明赤褐色を呈している。

S K01 [第17図、28]

弥生土器

甕（28） 底径は4.7cmを測る。平底を呈し、立ち上がり部分は少し内湾する。内外面に刷毛目を施し外面に黒斑がある。胎土に2〜4mm大の砂粒を多く含み、淡赤茶色を呈する。

S K39 [第17図、29]

弥生土器

甕（29） 下層からの出土で器面は摩耗している。そのため調整痕は不明であるが外面に薄い刷毛目がみられる。胎土は2mm大の砂粒を多く含み、茶褐色を呈している。復原底径は7.0cmを測る。

石器 [第22図、102]

石磁（102） 黒曜石製で左肩端部を欠損する。柄は深く両面とも丁寧に加工を施している。

第17図 土壌出土土器実測図（1/3）

S K44 [第17図、30]

須恵器

大甕（30） 最下層からの出土の細片である。肩部外側に自然釉がかかり、後に剥落している。外面体部および内面は横方向のナデ調整を施す。細砂粒を含み、紫褐色を呈する。

S K69 [第17図、31]

白磁

皿（31） 復原口径9.4cmを測る。白色的透明釉をかけるが口縁部は口ハケである。胎土は黑色微粒子を含んだ乳灰色を呈している。下層からの出土遺物である。
SF 200 上層遺物 [第18図、32〜64]

土師器
小皿（32） 口径 8.5 cm、底径 5.0 cm、器高 2.2 cmを測る。内外面はヨコナデで、外底部は糸切り痕が残る。胎土は赤色粒子を含む淡赤褐色を呈し、焼成はやや甘い。
銚（33） 口縁端部は平端で2条の突帯の下に葉文のスタンプを押印する。微砂粒を含み、灰茶褐色を呈する。
火銚（34） 脚部と思われるが細片のため定かでない。胎土は精選され明赤褐色を呈する。
摺銚（35） 体部内面は刷毛目調整後に5本単位の筋目を入れる。外面はナデ調整を施す。胎土は精選で明赤褐色を呈する。
土鏡（36〜40） 全て口縁部に突帯を貼付けるタイプである。36、37は内面に横方向の刷毛目調整を施し、外面はヨコナデで仕上げる。38、39は内外面にヨコナデ調整が施される。40は内面に横方向に刷毛目調整を施し、外面は縦方向に刷毛目調整し、後に突帯を貼付ける。37、39は外面にススが付着する。
羽釜（41） 内外面ともヨコナデで仕上げる。胎土は精選され淡茶褐色を呈する。
茶釜（42） 体部に1 cm大の孔を有している。箋下部に指頭圧痕を認め、内外面ともナデ調整を施す。
土鏡（43・44） 43は完形品で最大径 1.0 cm、内口径 2.5 mm、長さ 2.7 cmを測る。赤色粒子を含み淡茶褐色を呈する。44は最大径 7.5 mm、内口径 2.5 mm、現存長 2.8 cmを測り、色調は明赤褐色を呈する。

瓦器
銚（45） 口縁部を内へ折り曲げたタイプで、外面は工具による数条の沈線を施し、その間に連続した菊花文を押印する。内面は横方向に工具でナデ調整を施す。
捏銚（46・47） 46の口縁部内外面はヨコナデ調整で、体部外面は縦方向にナデで仕上げる。細砂粒を少し含み淡青灰色である。47は表面の腐食が著しいため調整は不明である。砂粒を多く含み淡灰色を呈している。
釜（48） 口縁部は内傾し、肩部との境に2条の線を施す。胎土に2 mm大の砂粒を少し含み淡灰褐色を呈す。復原口径は16.6 cmを測る。

瓦質土器
銚（49） 2条の貼付突帯を有し、間に菊花文と葉文のスタンプを押印する。胎土は細砂粒を少し含み、淡灰色を呈す。
捏銚（50） 内面に刷毛目調整を施し、底部外面に指頭圧痕、底面に板目圧痕をそれぞれ認められる。砂粒を少し含む淡灰色で焼成はやや甘い。
摺銚（51） 内面に8本単位の筋目を入れ、外面はヨコナデを施す。胎土は精選され内面は淡
黒灰色，外面は淡灰色を呈す。

白磁

皿（52） 復原口径 9.4 cm を測り、乳灰色の胎土に白色の釉をかる。焼成は普通で、底部は露胎である。口縁部は緩やかに外反する。

底部（53） 復原高台径 2.8 cm を測る。高台底部は削り出しで、体部下位は露胎である。乳灰色の胎土に白色の透明釉が薄くかかる。内面見込み部分に貫入がある。

青磁

碗（54・55・56） 54は灰白色の胎土に青緑色の透明釉がかかる。焼成は良好である。口縁部がわずかに肥厚し、外面にヘラ先による蓮華文があり、弁の先端は連続した山形の刻線によって表現されている。復原口径11.6 cm。55は淡灰色の胎土に濃青緑色の釉が厚くかかる、貫入を認める。急付け以外に施釉し、復原底径 3.6 cm を測る。56は内面見込みに片切形による草花文を施す。青灰色の胎土は精選されており、青緑色の透明釉がかかる。外底部は露胎である。復原高台径 6.5 cm を測る。

青白磁

皿（57） 復原口径は 12.0 cm を測り、口縁部は大きく外反し、口ハゲである。乳灰色で淡青緑色の釉が薄くかかる。

染付

碗（58） 口縁部内外面に 2 条の線と体部外面に唐草文を描いている。黑色粒子を少し含み淡白色で焼成は良好である。

陶器

壷（59・60） 59、60は常滑の細片である。59の胎土は微砂粒の紫褐色を呈し、外面に黒～灰色の自然釉がかかる。器厚は 1.3 cm 前後である。60は平底を呈し、内外面ともにナデ調整を施している。胎土は細砂粒を含む紫褐色を呈す。

雑釉陶器

椀（61） 内外底部には回転ヘラケズリによる稜が鮮明で、重焼きの目差を 5 個づつ認める。胎土は細砂粒を含む淡青灰色を呈し、乳白色の釉が薄くかかる。

須恵器

壷（62～64） 全てが体部細片である。62は外面に平行タタキを施し、内面は平行タタキに同心円が入る。63は外面に一度 6 mm の格子目タタキを施し、内面は同心円が入る。64は内外面に平行タタキを施す。

石器（第22図、107）

削器（107） サヌカイト製で、裏面右端縁に刃部加工を施している。
第18図  S F200 上層出土土器実測図（1/3）
S F200中層遺物 [第19図、65～78]

弥生土器
高杯（65） ミニュチュアの手捏ねで外面に化粧土を施している。2 mm大の砂粒を多く含む淡茶褐色で焼成は甘い。

土師器
土鍋（66・67） いずれも口縁部に突帯を貼付けた細片である。66は内面に横方向の粗い刷毛目を施し、外面はヨコナデで仕上げる。胎土に細砂粒を含む淡茶褐色を呈す。67は外面にススが付着する。内外面ともにナデ調整を施す。胎土は砂粒を多く含む茶褐色を呈している。

摺鉢（68） 内面に6本単位の筋目を入れ、外面はヨコナデで仕上げている。焼成は軟質で色調は淡灰褐色を呈す。

火鉢（69） 復原口径22.0 cmを測る。口縁部端は平担で、内面に1条、外面に3条の突帯を貼付する。胎土は精選され、明赤褐色を呈す。

瓦器
摺鉢（70） 復原底径14.0 cmを測る。内面に5本単位の筋目が入り、体部と底部の境に稜を有している。外面はナデ調整で底部は平らである。胎土に少量の砂粒を含む黒灰色を呈す。

白磁
皿（71） 復原底径は6.0 cmを測り、やや薄手である。塗付け部分は露胎で白色の釉をかける。胎土は乳灰色を呈している。

合子（72） 復原口径5.4 cm、復原受け部径4.4 cm、復原底径3.4 cm、器高1.8 cmを測る。内面と口縁部外面に透明な釉をかけ、外面体部にヘラ先で沈線を描く。

青磁
碗（73・74） 73は復原高台径4.8 cmを測り、高台外面には稜を有す。胎土は淡青灰色を呈し、青緑色の釉を薄くかける。外面底部と塗付け部分は施釉されていない。74は復原高台径5.2 cmを測る。乳褐色の胎土に緑灰色の釉をかけ、内面見込みはかき取られている。

陶器
大鰻（75） 長沙窯系である。内外面に鉄絵を施しているが外面は剝離している。胎土はやや粗く淡灰色を呈している。

粉青磁器
印花文瓶（76） 底部最大径18.0 cmを測る。淡紫灰色の胎土で外面は白土の象嵌を施し、白灰色の釉をかける。外面も施釉され釉ぐれを認める。

須恵器
大甕（77） 体部細片で、外面に平行格子目タタキを施し、赤褐色を呈す。内面は平行格子目タタキに同心円が入り、淡青灰色を呈す。器厚は1.4 cmを測る。
糊鉢（78）口縁部細片で内外面はヨコナデを施している。色調は淡青灰色で、突帯上部に自然釉がかかった。

石器（第22図、108）削器（108）珪質岩の剥片を素材とする削器である。裏面の左側縁に刃部を作出する。

第19図 S F200中層出土土器実測図(1/3)
SF200 下層遺物 [第20図、79～85]

土師器
皿（79） 表面磨耗のため調整は不明である。復原口径13.0cm、復原底径10.0cm、器高1.5cmを測る。胎土は赤色粒子を含み淡褐色を呈している。底面には板目圧痕を認める。
土鍋（80） 内面は横方向、外面は斜め方向に刷毛目を施している。胎土に細砂粒を含む茶褐色を呈す。外面に薄くススが付着する。
鉢（81） 口縁端部は平坦で2条の突帯を貼付する。それぞれ突帯の下位にはスタンプが押印され、上部が縄状文、下部が葉文を呈す。
火鉢（82） 底部細片で2条の突帯を貼付する。それぞれ突帯の下位にはスタンプが押印される。外面には粗い横方向の刷毛目を施し、胎土は微砂粒を含む暗茶褐色を呈す。
摺鉢（83） 内面は横方向刷毛目の調整の後、6本単位の筋目を施し、外面は縄方向の刷毛目で仕上げる。胎土は極少量の砂粒を含む暗茶褐色を呈す。器厚は1.0cm前後を測る。

青磁
碗（84） 復原口径9.0cmを測り、乳灰色の胎土に淡青色の釉をかける。外面にヘラ描きの蓮弁文様を施す。
高台付盤（85） 龍泉窯系で、復原高台径9.2cmを測る。胎土は密で灰茶色を呈し、緑茶色の胎釉が全体に厚くかかる。高台部分は露胎で、内外面に貫入を認める。

SF200 最下層遺物 [第20図、86・87]

土師器
土鍋（86） 内外面ともにヨコナデ調整で外面にススが付着している。口縁部に貼付突帯を有し、端部は窪みを施す。

青磁
四耳壺（87） 復原高台径10.6cmを測り、胎土は黒色粒子を含む乳灰色で、淡青白色の釉を内面と外面高台付近までかける。

SF190 最下層遺物 [第20図、88・89]

青磁
碗（88） 高台径5.8cm、高台高0.9cmを測る。胎土は淡青灰色で濃青緑色の釉をかけるが皿付けと外底部は露胎である。

染付
碗（89） 外面に唐草文、内面見込みに花文を描いている。乳青色で精選されており、透明な釉がかかる。高台置付けは露胎となる。

— 30 —
第20図　SF200下層・最下層・SF190最下層出土土器実測図(1/3)

S P 32 〔第21図、90・91〕

弥生土器

壷(90・91) 90は復原口径27.0cmを測り、口縁部は「く」の字状に外反する。表面磨耗のため調整痕は不明である。胎土は2mm大の砂粒を多く含み、淡茶褐色を呈している。91はやや丸みを帯びた底をなしている。内外面ともにナデで仕上げており、胎土は砂粒を多く含み暗茶褐色を呈している。

表土採取 〔第21図、92～96〕

土師器

土鍋(92) 復原口径部外径32.0cm、内径20.6cm、器壁の厚さ1.45cmを測る。内外面ヨコナデで仕上げ、砂粒を含む淡赤茶色を呈する。

白磁

皿(93) 見込み泥部分に一条の沈線が巡り、胎土は乳白色で白色の半透明な釉を底部までかけている。復原底径は7.3cmを測る。
青磁

碗（94・95） 94は高台径5.7 cm、高台高9 mmを測る。胎土は黒色粒子を含む青みがかかった白色で、青緑色の半透明な釉を塗付以外の部分にかける。また、見込みは貫入があり、釉が黒澄んでいる。95は細片で外面にヘラ描きの蓮花文がある。内外面に貫入があり、青緑色の透明な釉をかけている。

染付

皿（96） 高台径3.8 cm、高台高3 mmを測る。明白色の胎土に透明な釉をかけ、外面下位にコバルト色で一連の模様を描く。

調査区外 表土採集 [第21図、97〜100]

土師器

甕（97） 復原口径21.4 cmを測り、口縁部は外反する。内外面ともにヨコナテを施し、口縁部外面に薄い刷毛目痕を認める。胎土は少量の砂粒を含む淡茶色である。

白磁

碗（98・99） いずれも細片である。98は口縁端部が平担で、乳灰色の透明な釉をかけ、胎土は黒色微粒子を含んだ乳灰色を呈する。99は口縁端部に茶色の線を描く。胎土は乳灰色を呈し、透明な釉をかける。

施釉陶器

不明品（100） 細片のため器種は不明である。胎土は淡赤紫色に白色で模様を描き、不透明な釉をかける。焼成は良好である。

第21図 ビット・その他の出土土器実測図(1/3)
第22図　石器実測図(1/2)

「参考文献」
1. 久留米市教育委員会 「安武地区遺跡群Ⅰ」久留米市文化財調査報告書第56集 1988
2. 福岡市教育委員会 「有田・小田部 第7集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第139集 1986
3. 福岡市教育委員会 「博多30」福岡市埋蔵文化財調査報告書第285集 1992
4. 東京国立博物館 「日本出土の船載陶磁器朝鮮・ベトナム・タイ・イスラム」 1993
5. 九州歴史資料館 「大宰府史跡」昭和53年度発掘調査報告 1979
6. 九州歴史資料館 「大宰府史跡」昭和63年度発掘調査報告 1989
7. 九州歴史資料館 「大宰府史跡」平成元年度発掘調査報告 1990
8. 九州歴史資料館 「大宰府史跡」平成2年度発掘調査報告 1991
第4章 おわりに

以上が、県営千拓地等農地整備事業 築後西部地区の圃場整備事業に伴い実施された「樋崎遺跡」の内容である。

当遺跡では、弥生時代中期から近世におよび遺構や遺物を検出した。先述したとおり、検出した遺構には掘立柱建物7棟、溝9条、土壇4基、道路状遺構、ピットなどがあり、内容はバラエティに富んでいる。

弥生時代中期頃の遺構は、埋立状況などからSD05、SD28、SD39および掘立柱建物群と考えるが、時期を推定するには資料不足の感は否めない。その他の遺構はほとんどが中世を主とするが、なかでも注目されるのが道路状遺構である。溝や硬化面を併せもった遺構は、互いに密接な関係があるものと考え、ここでは道路としてとらえることにした。第Ⅰ期は、遺構の最下層から青白磁の四耳壺を出土しており、14世紀代と考える。更に、第Ⅰ期から第Ⅱ期への変換期からは龍泉窯系青磁の碗や高台付盤を出土しており、15世紀頃にあたるものと考える。

第Ⅱ期では李朝の粉青沙器や白磁の皿などから16世紀頃に比定できる。

こうしてみると、道路状遺構は第Ⅰ期の14世紀代を期に次第に活発になるが、側溝は機能の低下や消滅といった段階を踏む。第Ⅱ期から後は第1図 1902年（明治35年）測量の地図に示すように、水田村周辺の主要村道として使用され、耕地整理事業等により消滅していったものと考える。なお、道路状遺構については、資料不足を承知のうえ、あえて一応の時期比定を試みたが多少無理な点もあり、今後再検討の余地がある。

以上のように、今回の調査ではほとんどの遺構でまとまった出土遺物が得られなかったにもかかわらず、多くの成果や新知見を得ることができ、今後の調査や地域の歴史解明の資料として活用されることを期待したい。

なお、道路状遺構で検索方法など誤調査があったことに気づき、太宰府教育委員会の方々から御教示、御指導を受け、その後の調査を進めていった。ゆえに報告は、指導を受けた後の調査資料を中心に行うよう努めた。この場を借りてお断りを申し上げたい。
図版
図版1

稲崎遺跡遠景（気球写真、南西上空から）
図版2

(1) 椿崎遺跡全景（気球写真、西上空から）

(2) 椿崎遺跡E区全景（気球写真、真上から）
(1) A区SF 200、SF 190全景（北から）

(2) D区SF 200全景（気球写真、真上から）
溝・土壌・道路状遺構上層出土土器
図版 6

道路状遺構上層出土土器
道路状遺構中層・下層・最下層出土土器
図版 8

(1) 道路状遺構最下層出土土器

<table>
<thead>
<tr>
<th>90</th>
<th>91</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>92</td>
<td>93</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(2) ビット・その他の出土土器

<table>
<thead>
<tr>
<th>94</th>
<th>95</th>
<th>96</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>97</td>
<td>98</td>
<td>99</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(3) 石器

<table>
<thead>
<tr>
<th>100</th>
<th>101</th>
<th>102</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>103</td>
<td>104</td>
<td>105</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>106</th>
<th>107</th>
<th>108</th>
</tr>
</thead>
</table>
榎崎 遺跡

筑後市文化財調査報告書
第 9 集
平成 5 年 3 月 30 日

発行 筑後市教育委員会
筑後市大字山ノ井 8 9 8

印刷 有限会社 一の瀬印刷
福岡県筑後市大字平和 225